

聖書：ヨハネの黙示録 3：14～22

説教題：戸の外に立ってたたく主

日時：2021年1月17日（朝拝）

アジアにある7つの教会に対する主のメッセージの第7回目、ラオディキアにある教会へのメッセージを見て行きます。この町は前回のフィラデルフィアから南東へ約75km行ったところにある町で、今日はトルコのデニズリ県エスキヒサルという村に当たります。当時このラオディキアは交通の要所として金融業が栄え、黒い羊毛の毛織物業が盛んだったようです。また有名な医学校があり、特産品は目薬だったとのこと。これらは後に見るメッセージと関係します。

ラオディキアはこのように豊かで繁栄していた町でしたが、そのことは霊的な豊かさと直結しないことをこれまでも見て来ました。ここに見るのは7つの教会の中でも最も霊的に危機的な状況にある教会です。2つ前のサルディスの教会では、「あなたは死んでいる」という主のことばを見ました。これ以上悪い教会はないのでは？と思いましたが、そこにはわずかながら衣を汚さなかった者たち、すなわち主に忠実に歩む残りの者たちがいました。しかしラオディキアにはそういう人たちもいません。称賛の言葉は一つもなく、ただ叱責の言葉があるのみです。

果たしてこの教会の問題は何だったのでしょうか。主は15節でいつもの通り、「わたしはあなたの行いを知っている」と語った後、こう言われました。15～16節：「あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。そのように、あなたは生ぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしは口からあなたを吐き出す。」一言で言えば、ラオディキアの教会は生ぬるい教会でした。ここを読んで気になるのは、冷たいか熱いかであってほしいとイエス様が言っていることの意味です。これはこのどっちかであれば良いということなのか。熱くてもいいし、冷たくてもいいが、その中間だけがダメということなのか。この説明としてよくなされるのは、近くにあったヒエラポリスとコロサイの町との比較です。ラオディキアの北にはヒエラポリスという町があり、そこは有名な温泉地でした。そこから出る水は熱い水です。それは人々を健康にしました。また東にはコロサイという町があって、そこには冷たい水が湧き出る水源がありました。それは新鮮な水を人々に供給しました。ところがラオディキアにはそのような水を得られる場所がなく、隣町

からパイプを通して引っ張って来なければなりませんでした。そのため、この町に届く水は生ぬるくなっていました。そういうこの町の問題とかけ合わせてこれは語られている、と。そうかもしれませんが、ただこれだけだと熱いことと同様に冷たいことも良いこととして見られることになってしまいます。

しかしおそらくこの熱い、冷たいは主との関係について言っているものと思います。その場合、冷たくて良いということが果たしてあるでしょうか。聖書では熱心であることが勧められているように思われます。もちろん知識に基づかない熱心とか、一時的な熱狂ではない正しい熱心のことです。たとえば次のような御言葉が思い起こされます。「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい」(ローマ 12 章 11 節)。またアポロについて使徒の働き 18 章 25 節に「この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたり、云々」とあり、ここでも「霊に燃えて」が良い意味で使われています。またパウロは愛弟子テモテに II テモテ 1 章 6 節で「私の按手によってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。」と言っています。今日の箇所でも 19 節で「熱心になって悔い改めなさい」と命じられます。ですからやはり熱い方が良いのです。しかしそうではなく、生ぬるい状態になっているラオディキア教会に対して、主はそれならまだ冷たい方がましだ！と衝撃的な言い方をされたのだと思います。冷たくて良いということは決してないのですが、まだその方が良いと言うほどに生ぬるい状態は主にとって嫌悪すべきものであるということです。

より具体的に彼らの問題は何だったのでしょうか。それは 17 節から伺えます。そこに彼らは「自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っている」と記されています。彼らは自分たちについて良いイメージを持っていました。自分に満足していました。自己満足していました。ところが実際は「みじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない」と主に言われています。ここに自己理解と主の評価の大いなるギャップがあります。この彼らの誤った自己理解はこの町の豊かさを背景にするものだったと思われる。一つの逸話として、この地方には紀元 60 年に大きな地震があって相当なダメージを受けた時、この町はローマ皇帝からの援助の申し出を退けて、自分たちの力で建て直したそうです。そして「我々はどこからの助けも受けず、自分たちの資源で再建した」と誇っていたそうです。まさにここにある通りです。「私たちは富んでいる、豊かである、足り

ないものは何もない。」　そういう意識がこの地の教会の中にも入り込んでいた。そして彼らは信仰においてもそのように考えていた。我々は神に祝福され、このように満ち足りて、豊かである。不足するものは何もない。そのように満足していた。しかし主が見るとその評価は全くの誤り。実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、目が見えておらず、裸であることが分かっていない。いかに私たちは自分を欺きやすいかという警告をここにも見させられるのではないのでしょうか。そして聖書の他の箇所でも言われていますように、特に経済的な豊かさが人をそのような誤った判断に導きやすいということです。物質的な豊かさが、その人の心を満たし、一杯にし、いつしか主を端の方へと追いやってしまう。これが生ぬるさの大きな原因です。自分の罪深さ、無力さを悟らず、むしろ自信をもって私は大丈夫、祝福されていると思っていたが、主が見ると全くそうではない。口から吐き出したくなると主が言われるほどの危機的状態だったのです。

しかしそんなラオディキア教会を主は見捨てず、なおメッセージを語っていただきます。まず出だしの14節で主は「アーメンである方、確かに真実な証人、神による創造の源である方がこう言われる」と自己紹介の言葉を語られます。「確かに真実な証人」という言葉は1章5節の言葉に対応しています。主は確かに真実なことを語られるお方です。アーメンという言葉も同じことを強調しています。アーメンとは「その通りです」という意味で、イエス様がしばしば「まことにまことにあなたがたに告げます」と言われた時の、あの「まことに」という言葉はアーメンという言葉です。ラオディキアの教会員たちの自己理解は誤っていて、信頼に値しませんが、主が語られる言葉は真実で、信頼できる言葉です。また「神による創造の源である方」ともあります。イエス様は父なる神とともに、天地創造のみわざに関わられた主権者です。そのような権威ある方のおことばとしてラオディキアの信者たちは聞かなければなりません。

その方は18節で「わたしはあなたに忠告する」と言って、豊かな者となるために、これこれのものを買いなさい！とされます。ここに3つのことが言われています。一つは金、一つは衣、もう一つは目薬。これらはいずれも冒頭で触れたこの町の特徴と関係します。この町は金融業が盛んで、彼らは自分たちを金持ちで裕福だと考えていました。また毛織物業が栄えていて、立派な着物を持っていると誇っていました。また目薬はこの地の特産品で、この点でも自分たちは他の上を行くと

思っていました。しかしそれらを主は買い求めなさいと言われます。彼らはそれを持っていると自負していましたが、主が見ると彼らは持っていない。そして大切なことは「わたしから」買いなさいと言われていることです。つまり彼らが指し示す真に価値ある者、また豊かさは主にこそあるということです。彼らはこの世が与える金や衣や目薬は持っていたかもしれませんが、しかしそれらはやがて消えゆくもの、過ぎ行くものです。そうではなく、主が下さるまことの金、衣、また目薬を求めよ！ということです。火で精錬された金とは、キリストこそが持ちたもうものであり、キリストこそが与えることのできるものです。1章13節に主のお姿が、胸に金の帯を締めた方として描かれました。その方から混じり気のない純粋な金、真の豊かさを受けよ！ということです。また白い衣を買いなさいとあります。あなたの裸の恥をあらわにしないために。この町は黒い羊の毛の衣服の生産で有名だったようですが、どんなに優れた衣服を地上で手にしていても、やがてのさばきの日にそれを着て神の前に立つことはできません。それらは裸の状態を覆ってくれません。しかし主は私たちが神の前に立つ時、裸の恥をあらわにしないための白い衣を下さいます。キリストの義の衣です。そして三つ目に目が見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさいとあります。彼らは霊的に盲目の状態にあります。霊的視力の回復が必要です。それはキリストだけが与えてくださいます。その目薬をいただいて、自分がいかにみじめで、哀れで、救いを必要とする者かを知るように。またキリストの素晴らしさと栄光をはっきり認める者となるように。また世界を正しい目で見える者となるように導かれる必要があります。

その後続く19節の言葉は驚くべきものです。これだけ落ちるところまで落ちて、次の瞬間には吐き出すとまで言われた教会に対して、主は「わたしはあなたを愛しているから、こうするのだ！」と語りかけておられます。だから叱ったり、懲らしめたりするのだ。ただ責め立てているのではない、と。だから熱心になって悔い改めなさいと言われていました。悔い改めとは生活の方向転換をすること、向きを変えて新しく出発することです。

そして20節にヨハネの黙示録の中でも特に有名な御言葉が出て来ます。「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。」しばしばここは伝道メッセージ向けの箇所とされています。しかし前後関係から分かりますように、これは未信者に対するものではなく、クリスチャンに対する言葉です。驚くべきことに、ここで言わ

れているのは、クリスチャンがイエス様を外に締め出しているということです。果たしてそれはクリスチャンなのかと思われるかもしれませんが、それがラオディキアの教会と教会員たちの姿でした。またこれは今日の私たちの姿でもあり得ます。この世の富に満足し、この世が与える豊かさで心一杯になり、キリストを自分の心の家から閉め出して。そしてキリストは戸の外に立ってたたいている。これが反対ならまだ分かります。私たちが外に立っていて、イエス様に中へ入れてくださるようお願いしているのなら分かります。しかしキリストが戸の外に立っているのに私たちが中へ入れようとしない。そんな中、イエス様はたたき続けておられる。何ということでしょうか。

私たちに言われていることは戸を開けることです。心の戸です。そしてイエス様の中に入れていただくことです。その意味は、イエス様を私の家の主人として迎えることです。私たちはそれぞれ自らの城を心の中に持ち、そのお城の君主として振舞おうと思っています。そしてそこにはイエス様にも入って来てもらいたくない。自分が主人であることをキープしたまま、イエス様は端の方にも入りたいなどと考えてしまいやすいのではないのでしょうか。そしてそうする内、イエス様をいつの間にか、外に追い出してしまっているのではないのでしょうか。しかしここで言われていることは、戸を開けてイエス様に主として入っていただくことです。主を主とし、自らの心を主に明け渡して、自らはその方に治め導いていただく者となることです。その時、主は私たちのところに入り、ともに食事をするとあります。ここでの食事は時間をかけて食事をする時に使われる言葉です。イエス様は私たちのために時間を取って、ゆっくり交わってくださる。そこでご自身のすべてを分かち合ってください。そしてそこで私たちはイエス様から真の豊かさを受ける者となります。この世の金ではなく、精錬された金を。またこの世の黒い衣ではなく、天国でいつまでも続く白い衣を。またこの世の目薬ではなく、霊の眼が開かれて、真に美しいものをはっきり見ることができるようになる目薬を。そこに私たちを真の意味で満たす満たしがあり、その主を味わい知ることによって、私たちは主への正しい熱心をもって主とともに歩む者と導かれるのです。

最後に 21 節に勝利を得る者、すなわちこのイエス様の言葉に従って、この課題を克服する者に将来与えられる祝福が語られています。21 節に「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる」とあります。それはその後の言葉から分かり

ますように、イエス様が地上の歩みを成し遂げて、父なる神によって上げられた至高の座、王座のことです。そこに主が引き上げてくださる。これは20節と関係しています。私たちは戸を開けて主に入ってください、私たちの心の王座に主に座っていただきます。主に私たちの心の支配者になっていただきます。そうするなら主は私たちを引き上げて、今度は主が私たちを座らせてくださいます。何と主とともにこの世界と宇宙を治める座に、天の御国を治める王座にです。詳細は語られていませんが、これは私たちが主の御心のために、主と同じ心で、仕えて治める者になるということでしょう。御国で大きな使命と責任を与えられ、その奉仕を通して主とともに治め、また仕える光栄に生かされる者となるということです。そして最後の22節には「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい」と語られ、ラオディキア教会だけでなく、すべての時代のすべての教会が、聞く耳を持つ者として、このメッセージを自らに適用し、生かすように！と語られています。

私たちはどうでしょうか。主は今、私との関係において、どこにおられるでしょうか。私たちの心の家の中におられるでしょうか。それとも私たちは主を外に追い出して、そこに立たせた状態にしているのでしょうか。その主のノックの音は私たちに聞こえているのでしょうか。その主のノックを無視して主を自分の家に迎え入れず、相変わらず自分が主人となって、この世を自分の好きなように生きることができるかもしれません。そして自分は豊かになったと悦に入り、自己満足しているかもしれません。しかし主が今日の箇所で言われた通り、実はみじめで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であるということはないでしょうか。主は「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている」と言っておられます。「たたいている」という言葉は現在時制で書かれていて、今この時もそうしているというニュアンスを示しています。もし主を外に追い出したままにしていることを思うなら戸を開いて、主に自分の心の家へ、その中心へと入っていただき、主を主とする生活に立ち戻って行く者でありたいと思います。主の御言葉に聞くことを大切にし、祈りを通して主と交わり、その主の御言葉に従う生活をする者へと。その時に私たちの前には主との食事にたとえられる素晴らしい交わり、満たし、またこの上ない豊かな歩みが開かれて行きます。そして主はその者をやがて天の御国でご自身の座に着かせて、ともに治める特権と光栄へと導いてくださいます。